

「中東」の街かどから—イスラエル・パレスチナ

(写真 上段がパレスチナ, 下段がイスラエル)

写真・文 静岡県立掛川東高等学校 藤森 数正



「テロ」や「紛争」と関連づけて報道されることの多い「中東」。2015年12月にイスラエル/パレスチナに赴き、人々から生の声を聞いた。

エルサレムからアラブバスで向かったのは、ヨルダン川西岸地区。この地域の人々は外国人に対しひじょうに気さくで、一度話しだすと止まらない。死海に面するイエリコ行きのタクシーで乗り合わせた、ラマラの銀行員ターリク・マハジュネーさん(25)(写真①)もその一人だ。パレスチナのパスポートの他に、ヨルダン政府のパスポートも持っていて、この日は隣国のヨルダンへ向かった。筆者はイエリコに到着すると、アカバット・ジャベル難民キャンプを訪れた。1948年に設置され、もはや一つの都市と化している(写真②)。

パレスチナ人(アラブ系のイスラエル国民)といっても、ムスリムばかりではない。ベスレヘムには、「メリー・クリスマス」というあいさつが飛びかい、サンタクロースの装飾が街をいろどる。市内のホテルで働くワリードさん(25)(写真③)は、「親戚にはキリスト教徒もいる。自分はムスリムだが、『同じ神』だから問題ない」と話す。ベスレヘムに限らず、パレスチナ旗の掲げられたクリスマスツリーは、パレスチナのいくつかの都市で見られた(写真④、イエリコにて)。

ユダヤ人の街も訪れた。ニッシム・ベンヨミンさん(80)、シムハさん(72)夫妻(写真⑦)は、イスラエル建国後にモロッコからテルアヴィヴ近郊に移住し、街を支えた敬けんな超正統派(ハレーディー)。静岡県島田産の緑茶が好物、慈善で自宅の一部を精神病患者の施設にしている。奥様のシムハさんは「毎日忙しければ、10人の息子・娘が全員結婚をしたことは、ほんとうに

誇りに思っている」と話す。ニッシムさん宅に一夜した翌日、ニッシムさんはイザヤ書の一編を歌い、送り出してくれた。「わたしの家は、すべての民の祈りの家とよばれる」と。

西エルサレムの開発は著しく、市内にはライトレールが走り、中央駅は買い物客や若者でにぎわう。目を引いたのはコーシャ(ユダヤ教の食事規定)に則ったマクドナルド(写真⑤)。安息日(土曜日)定休で、乳と肉と同時に食べないという規定を守りチーズバーガーは提供しない。アルバイトのエフライムさん(19)(写真⑥右)のように、「アメリカに行きたい」と話す若者が多かった。

ユダヤ人とパレスチナ人の居住地は明確に分かれているので、ダマスカス門駅から東エルサレムに向かいちょっと歩いただけで、まるで別の国だ。旧市街の城壁の一角から、威勢のよいテコンドーのかけ声が聞こえてくる(写真⑧)。講師のイブラヒーム・アブー=ミラさん(18)は専門学校に通いながら、ここアブナー=アル=コッズ・クラブというコミュニティ・センターで、6~12歳のアラブ系児童を指導する。運営者のジハード・ファリードさんは「教育・福祉は十分とはいえない。子どもたちのため、湾岸諸国等から資金を調達したり、サッカーのコーチ等によい人材を雇ったりと、維持するために尽力している」という。

中東は、日本から見ると「わかりにくい」場所だ。だが、「わかりやすい」ストーリーを描くことは、かえって事態を「わかりにくい」ものにしてしまうこともある。国際情勢の暗雲や、民族間の対立の行方は不透明だ。しかし、報道や写真の向こう側にある人々の日常と生き方に対して、歴史の経過と現状をていねいに重ねあわせながら、できるかぎり想像力をはたらかせることができればと感じる。